

**Canon**

表紙写真 ●カンボジア「バンテアイ・スレイ遺跡」(撮影  
=吉田繁) : 「遺跡の規模は小さいのだが、アンコール  
遺跡の中で「東洋のモナリザ」といわれているデバ  
ター像をはじめ数々のレリーフの美しさで知られて  
いるこの遺跡は、訪れるものを魅了してやまない。約  
1000年前の美しさを今、このままの状態で見たい  
と撮影している(吉田氏)」。EOS KISS DIGITAL  
X EF100mm F2.8マクロ USM 0.3秒~1/4秒 F22  
ISO200。メインカット42枚、露出補正および被写界  
深度補正用に15枚撮影。

**CPS事務局からのお知らせ**

会員様のご登録内容の  
変更についての  
ご案内

ご自宅の転居や事務所の移転などにより会員様の登録内容に変更があった場  
合は、弊社にてご登録内容の変更処理をさせていただきます。ご来社の際ま  
たはFAXにて必ずご連絡くださいますようお願い申し上げます。

変更の連絡先:

**FAX 03-3542-1845**

キヤノンマーケティングジャパン株式会社  
(氏名・会員番号をお忘れなく明記ください)

**機材貸出しに関するお願い**

修理代替機材および試用貸出し機材につきましては、貸出伝票に記載された返却予定日までにご返却くださいますようお願い申し上げます。

**CPS**  
[NEWS]

**2007.7**  
Vol.25

**Leading People** — 吉田 繁氏

数億画素の超高精細描写を  
「分割撮影+デジタル処理」で開拓する。

**Special Impression** — 持田昭俊氏

最新フラッグシップ機EOS-1D Mark IIIの機能を徹底検証

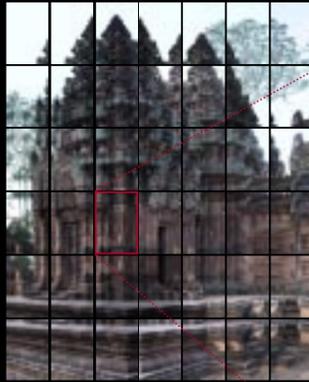
**D:Labo**

**PIXUS Pro**シリーズと**Easy-PhotoPrint Pro**で  
プリント品質&効率向上

**CPS Members**

**CPS新会員規則の主な変更点のご案内**

[表紙写真は分割撮影によって超高解像度を実現]

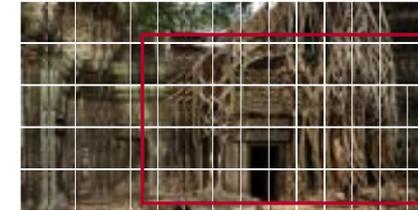


●完成画像は17500×13500画素、約1.3ギガのファイルになる。A1サイズだと、600dpiで出力可能。「東洋のモナリザ」、デバター像もごらんのとおり超高精細。



が、ステッチによる「デジタル高精細写真」にたどりついたきっかけは何だったのか。

「アメリカでは、デジタルプリントがファインアートプリント[\*]として、ギャラリーで頻りに売られ、美術館や公共施設にも収められたりしています。日本はまだそこまでマーケットが育っていませんが、それだけの価値がある



●カンボジア・「タ・プローム遺跡」。EOS 30D EF50mm F2.5 コンパクトマクロ 1.6秒 F11.5-16.5 ISO200。完成画像は36500×20500画素。「実はこの写真の木の上にヤモリがいて、縦を2mほどのサイズで出力したときに現れる(吉田氏)。

作品を作っていかなければ始まらない。両手で持って、じっくり鑑賞できるぐらいのサイズで、しかも目の醒めるような解像感があるものを作るにはどうすればいいかを突き詰めていった結果の技法です。」

このデジタル高精細写真をもっとも効果的に表現できる被写体が、アンコール遺跡をはじめとする、歴史の年輪が刻み込まれた石造りの遺跡だった。約1年をかけてノウハウを確立するに至った(p.03解説参照)が、その間にはさまざまな試行錯誤があった。

まず、被写体を縦横一定間隔で分割して撮影するために、カメラの回転軸を正確に調整



吉田 繁  
Shigeru Yoshida

1958年生まれ。日本大学経済学部卒業。広告・雑誌の仕事のかたわら、巨樹を中心とした自然写真を撮影。全国カレンダー展で通産大臣賞、日本商工会議所会頭賞などを受賞。デジタル写真をめぐる執筆、講演などでも活躍。  
<http://bigtree.maxs.jp/>

#### Leading People 04

吉田 繁  
Shigeru Yoshida

被写体を縦横分割して撮影。ステッチ(画像のつなぎ合わせ)によって、数億画素ものモノクロ画像に。未体験の解像感を出現させる。

ハーネミュレのA1マット用紙(594mm×841mm)に写しとられた、アンコール遺跡のモノクロ写真。目を近づけてみると、レリーフが細部に至るまで描写され、吸い込まれるような独特の奥行き感となって迫ってくる。

「大判フィルムで撮影した印画紙プリントだと思う人もいるかもしれませんが、この風合いの紙には、デジタルでしかプリントできない。しかも、この用紙の大きさでこの高解像度、そして空気感。写真の歴史の中で、初めての経験なのではないかと思います。」

吉田繁氏が自ら「デジタル高精細写真」と呼ぶ一連の作品は、被写体を縦横分割して撮影。それをパソコン上で専用のソフトウェアを使ってステッチをして、1枚の作品としてプリントしたものだ。撮影にはEOS Digitalを使用。高精度の分割撮影となるため、特製雲台にカメラを固定し、リモートスイッチでシャッターを切っていく。前述のアンコール遺跡の写真の場合、縦位置で撮影し、横7枚、縦6枚の計

42枚の写真がステッチされており、縦横約2億画素という巨大なデータとなる。

「10年前だったらこういう試みはできなかったでしょうね。カメラやソフトウェア、プリンタの進化があってこそです。」

#### デジタルの世界で表現 できることを 徹底的に追求したい。

中判・大判フィルムの愛用者だった吉田氏が、デジタルカメラを手にした経緯についてはp.03にまとめてみた。

「デジタルに移行すると決心してからは、フィルムは一切使わなくなりました。当初はいろいろ苦労することもありましたが、ソフトウェアに詳しくなったり、結果的にはよかったですね。」

一貫してデジタルの世界で表現できることにこだわり、模索を続けてきた吉田氏だ





●「ニューメキシコ州サンタフェ近郊」EOS 5D EF16-35mm F2.8L USM 1/4秒 F16 ISO100。「まるで宇宙船のような教会に、思わずシャッターを切ってしまった。大四つくらいのサイズにプリントするのであれば、十分な解像度を持つ(吉田氏)。

### 吉田繁氏のデジタルへの取り組み

- フィルム時代(80年代)**  
広告関連の物撮りを4×5で撮影。現像したフィルムをドラムスキャナでデータ化したあと、別撮りしたパーツを合成するなどして完成させていた。撮影から納品まで、時間との戦い。
- デジタル黎明期(90年代半ば)**  
スピードを求めてデジタルに移行。EOS DCS 1(有効約600万画素)を手にする。物撮りの効率が飛躍的にアップ。
- デジタル進化時代(2000年以降)**  
広告・雑誌の仕事のかたわら、EOS D30(有効約325万画素)で、国内外の巨樹を撮影。その後、EOS-1Ds(有効約1110万画素)、EOS-1Ds Mark II(有効約1670万画素)を使用。その成果は『地球遺産 最後の巨樹』(2002)、『地球遺産 巨樹バオバブ』(2005、共に講談社刊)などの写真集として結実。



- デジタル高精細の世界へ(2005年以降)**  
分割撮影した画像をステッチし、数億ピクセルの解像度を実現。さらに、デジタル高精細プリントによって、印画紙プリントとは別次元の新たな「空気感」をもったファインアートプリントを作り上げる。また、「デジタルカメラ・マガジン」(インプレス)などで、デジタルカメラに関わるノウハウの記事連載なども手がける。

できるようにしなければならない。三脚に既成のパノラマ撮影対応の雲台をつけて試みたが、微妙にズレてしまう。そこで、かつては町工場で腕をふるい、現在はボランティアでおもちゃ修理に携わっているという筋金入りの職人に、ぴったり3°ピッチで確実に固定できるように改造してもらった。また、近距離でズームレンズを使って撮影する場合、回転軸を三脚穴に合わせたのでは、画面の中央と端とで重なり具合が変わってしまい、うまくステッチできない。このため、ノーダルポイント(後側主点)と呼ばれるレンズの光学的な中心点に回転軸を合わせる必要がある。

「撮影前にホテルなどで、カメラを左右に

振って画面の両端の見え方にズレのない回転位置を探します。あと、最近の課題は、分割して撮影する枚数が増えたときに撮り忘れが出てしまうこと。最大で1カット用に150枚を撮ったことがありましたが、僕と編集者とガイドの3人でチェックしつつ撮影したにもかかわらず、漏れたカットがあった(笑)。」

パソコン上でステッチの際に使用するソフトウェアは主に「PTGui」(<http://www.ptgui.com/>)を使い、ピント面調整用に「Helicon Focus」([http://helicon.com.ua/pages/focus\\_overview.html](http://helicon.com.ua/pages/focus_overview.html))、ダイナミックレンジ拡張用に「Photomatix」(<http://www.hdrsoft.com/>)や「Adobe Photoshop CS2」([### 吉田繁氏のデジタル高精細写真の撮影技法](http://www.</a></p></div>
<div data-bbox=)



- ①**構図用の見本カット撮影**  
複数カット撮影し、最終的な仕上がりにイメージを決定。パソコン上のステッチ作業の見本に。
- ②**ノーダルポイント(後側主点)の特定**  
ズームレンズをつけた状態でレンズの光学的中心点を探し、特製雲台の回転軸と合わせる。
- ③**撮影モードを設定**  
ホワイトバランスは「太陽光」など色温度を一定にする。露出モードはマニュアル。2/3~1段の幅でブラケットング。
- ④**リモートスイッチで撮影**  
ミラーアップし、ぶれを抑えながら上下、左右、分割したエリアを1枚1枚撮影する。
- ⑤**専用ソフトウェアでつなく**  
パソコン上で専用ソフトを使ってステッチ。ピント面を調整するソフトを使って補正することも。
- ⑥**ファインアートプリント化**  
モノクロ化の調整を行ったあと、Photoshop large形式などで保存した画像を出力。

adobe.com/jp/)なども適宜使用している。モノクロ化の際にはRGBの濃度調整をはじめ、これまで培ってきたノウハウを最大限に発揮していく。「昔も今もカメラマンの技術を鍛えているのはモノクロの表現だと思っています。データの作り方、紙の選定など、完成度の高いプリントに仕上げるには、それなりの経験値が必要です。カメラからDPP(Digital Photo Professional)への一貫したフローは、暗部を表現するのにとても役立っています。あと、ピクチャースタイルの機能も気に入っています。いわばフィルムが選べることになるわけですから。」

### ライフワークの巨樹、森の写真をデジタルハイビジョン写真集として提示する。

「デジタル高精細写真」によるファインアートプリントの試みに加えて現在、吉田氏が

取り組んでいるのは、フルハイビジョン(1920×1080ピクセル)テレビに映し出す、映像コンテンツとしての「写真集」の制作だ。「RGBはオフセット印刷よりも色域が広いですし、静止画をフルハイビジョンテレビに映し出すことで、これまでにはない写真の見せ方ができる。時間軸に沿って、音を入れたり画像処理を施すなど、演出をして見せていく写真集になるでしょうね。次世代DVDやダウンロード形式の可能性もあります。大画面で巨樹や森の写真を体験してもらいたいですね。」  
「デジタル高精細写真」から「ハイビジョン写真集」へと、写真の見せ方に徹底的にこだわる吉田氏の活動には、今後も目が離せない。



「遺跡以外はEOS-1Ds Mark IIを使うことが多い(吉田氏)。上●「マダガスカル島ムルンダバ近郊」、EF16-35mm F2.8L USM 1/4秒 F16 ISO100 CCフィルター20Rを使用。下●「マダガスカル島ムンベ近郊」、EF16-35mm F2.8L USM 1/125秒 F11 ISO100。

(吉田氏が使用しているソフトウェアは2007年3月時点のものです)

## Field Working Partner —— フォトグラファーとともに写真を創る人々

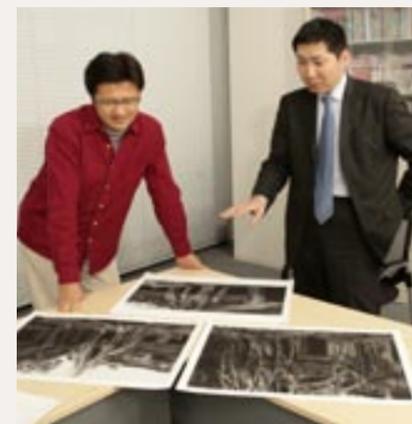
### 写真はファインアート。デジタルプリントで、写真家の思いを伝える。

Photographer 吉田 繁氏 (Shigeru Yoshida) / Art Gallery Shopkeeper 新居龍太氏 (「ギャラリー新居」東京店店主) (Ryota Nii)

「デジタル高精細写真」をファインアートプリントとして認知させていきたいとの吉田繁氏の思いを受け、氏の作品を扱っているのが「ギャラリー新居」東京店店主の新居龍太氏だ。これまで国内外の近現代の絵画や版画を中心に、東松照明氏をはじめとする写真家のオリジナルプリントの展示や販売も行ってきた。吉田氏とは2005年、日本写真家ユニオンと提携して行った展覧会で出会う。多数の公募から選ばれた11名の写真家の一人が吉田氏だった。

「デジタルカメラだからこそ実現できた、ステッチによる独特の奥行きに魅了されました。音が聞こえてこない、不思議な空気感がある写真を見たのは初めてでした。」

日本で写真作品を扱うギャラリーはまだ多くない。贈りものやインテリアの一部として日常的に売買される欧米と比べると、その存在自体を知る人が少ないのが現状だ。しかし



吉田氏(左)の作品で写真のマーケットを広げていきたいと語る新居氏(右)

徐々にではあるが、新居氏は需要の高まりを感じているという。

「展示の機会を重ねるごとに、購入されるお客さまが確実に増えてきました。中には絵画のように、ある作家の作品を収集する方もいらっしゃると思います。」

### 新居龍太氏

株式会社ギャラリー新居 東京店(東京都中央区銀座6-4-7)いらか銀座ビル5F tel.03-3574-6475)店主。大阪本店は1977年、東京店は1995年銀座に創業。 <http://www.gallery-nii.com>



### 写真作品の価値はデジタル、フィルムの違いを超えたところにある。

最近では印画紙よりもデジタルによるファインアートプリントを扱うケースが増えているとか。プリント自体の「アーカイバル処理(写真の保存処理)」も、さまざまな技術が出てきているという。

「吉田さんのように、デジタルで表現できるオリジナリティがあるかどうかが一番大事なのではないでしょうか。」

吉田氏の作品などは、いずれは海外にも紹介していきたいという。

「私たちが写真家とお客さまを繋ぐパイプになれば幸いです。そのためにも作家の表現意図を的確に受け止めて、展示方法や価格、エディションナンバーの有無などを話し合いながら、価値あるファインアート作品として、世に送り出していきたいと思ひます。」